

# 日本の多文化・多言語環境下での コミュニケーション



大阪大学人文学研究科 教授  
古川 裕

## 『消防職員のための中国語』 30年

1993年に国際文化研修所JIAMが開所して以来、翌1994年から現在に至るまで、私は中国語ネイティブスピーカーである胡士雲先生（神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部教授）とペアを組んで、いくつかの研修コースにおいて中国語の実習授業を担当してきました。また、胡士雲先生とは日中両言語で共に授業するだけではなく、『病院看護職員のための中国語』（1994年9月）、『公務員のための中国語』（1998年1月）、そして『消防職員のための中国語』（1994年9月第1版、2005年3月第2版、2016年3月第3版）など各研修の目的に特化したテキストを共著で編集してきました。

この間、新型コロナウイルス感染症の蔓延によって中止を余儀なくされた2020年度と2021年度の研修を除いて、ほぼ30年間の長きにわたって継続してきたのが「消防職員コース～非常時における外国人とのコミュニケーション～」です。これまで私たちの編んだテキスト『消防職員のための中国語』を使って中国語の授業を受けてくださった消防職員コースの受講者は日本全国にざっと500人近くおられるのではないかと思います。

「消防職員コース」は外国語科目として英語のほかに第二外国語の中国語とポルトガル語が選択肢として提供されます。いつもは本務校で大学生たちを相手に中国語を教えている私たちにとって、風光明媚な琵琶湖畔に出講し、日常あまり身近に接触することがない消防隊や救急隊あるいはレスキュー隊の皆さんと同じひとつの教室で共有する18コマの集中

授業は毎年恒例の楽しみであり、刺激に満ちた時間でもありました。この研修で中国語に触れたことをきっかけとして、職場に戻った後もこの教科書を教材にして中国語を継続して勉強していますという心強い連絡をいただいたことがあります。また、現地で中国語をしっかりと学ぶために、思い切って一生分の休暇を申請取得し中国へ留学に行ってきました…という嬉しいお便りをくださった受講者もいます。大げさに言えば、JIAMでの中国語授業はこれらの方々の人生設計を変えるほどのインパクトがあったようです。教師冥利に尽きるとはまさにこのことです。

## 多文化・多言語環境下でのコミュニケーション

上述のように、JIAMの「消防職員コース」では、英語に加えて中国語とポルトガル語の授業が用意されています。これは、日本社会が文字通りの意味で既に「国際化」し「多文化・多言語化」していることを象徴するものであり、特に非常時にあっては、日本語を解さない人々との潤滑な意思疎通が必要であることを如実に反映するものです。早くも30年前にこのような社会状況の出現を察知して、英語だけにとどまらない多言語の実習授業を開講してこられたJIAMの慧眼に敬意を表します。

贅言するまでもなく、現在日本の言語環境はマジョリティを占める日本語だけではなく、母言語を異にする様々な言語背景を持ったマイノリティの人々との共存が必要な多言語環境となっています。思い返せば、コロナ禍以前の日常は数多くのインバウンド旅行者で街

中が活気に溢れ、そこかしこから耳慣れない外国語が聞こえてきました。いずれポストコロナ期に入れば、以前よりも更に多くの外国人観光客が日本を訪れることになるかもしれません。

このように観光目的で短期間日本を訪れる旅行者だけではなく、日本の各地に外国人集住地帯が増えています。たとえば、ポルトガル語で書かれた公共サインを数多く見かける地域があれば、そこはブラジルを始めとする南米系の人々が多数定住して暮らしている場所だろうと想像されます。近年は中国や韓国など東アジアだけではなく、フィリピンやベトナムなど東南アジア諸国からの定住者も増えていると側聞します。

現在そして未来の日本を生きる私たちは、訪日観光客や在住外国人など数多くの非日本語母語話者が共存しており、日本語を得意としない人々との円滑な意思疎通が欠かせないことに自覚的でいなくてはなりません。たとえば仮に、私たちが現地のことばがおぼつかない外国へ旅をしたり、異国での暮らしを始めるなら…と想像してみましょう。我が身に置きかえてみれば、その不安や不自由さについて身をもって感じられますね。

私たちは、訪日観光客には日本での滞在期間を心地よく楽しんでもらえるように、定住

外国人には日常生活での不自由さを軽減し日々の暮らしが少しでも快適になるように配慮したいものです。これこそまさに日本人が得意とする「おもてなし」を発揮できる分野です。そこで、このような角度から、多文化・多言語環境下でのコミュニケーション、最後に中国語を通して見えてくる問題点を考えてみたいと思います。

## 緊急時に対応するための中国語

まず、JIAM「消防職員コース」の中国語授業では受講者の業務に関係する場面、すなわち消防や救急業務に関わる緊急事態時に中国語で対応するための例文をできるだけ具体的に提示するようにしています。研修用の教科書『消防職員のための中国語』は全10課で構成してありますが、後半の第8課から第10課までは火災発生場面での会話を学ぶようにデザインしています。

実例として第8課の会話文を紹介しましょう。教科書では中国語の例文に発音表記としてピンインと声調符号を添えています。ここではそれらを省略し、中国で用いられている簡体字表記を用いて会話文とその日本語訳を記します。

いかがでしょうか。ふつう想像される中国語会話の教科書とはずいぶん趣が違いますね。

<p>第8課 “快，打119！”（さあ早く119番に電話を！）</p> <p>会話1：</p> <p>甲：我们对面的商店着火了，怎么办哪？（お向かいの店が出火しました、どうしましょうか？）</p> <p>乙：火大不大？（火の勢いは大きいですか？）</p> <p>甲：挺大的。（すごく大きいです。）</p> <p>乙：那赶快给消防队打电话吧。（ではすぐに消防へ電話しなさい。）</p> <p>甲：消防队的电话是多少？（消防の電話は何番ですか？）</p> <p>乙：火警，打119就行。快点儿，不然就烧光了。（火事は119番でOKです。急ぎなさい、さもないと燃え尽きてしまうよ。）</p> <p>会話2：</p> <p>消防队员：喂，您好，这里是消防队。（もしもし、こちら消防です。）</p> <p>居民：您好，我们这里着火了，能来一辆消防车吗？（もしもし、こちらで火事になりました、消防車一台来てくれますか？）</p> <p>消防队员：请告诉我着火的具体地点。（火事の具体的な場所を教えてください。）</p> <p>居民：南城商业街的最北头。（南町商店街の一番北の端です。）</p> <p>消防队员：好，知道了。……马上去。（了解しました…すぐに向かいます。）</p>
---

（『消防隊員のための中国語』73-74頁）

## 消防安全常用フレーズ

1. 如果发生火灾, 请打119。 (火災の場合は119番。)
2. 请说清楚发生火灾的准确地点。 (火災発生の正しい場所を教えてください。)
3. 请问火大不大? (火はひどいですか?)
4. 请告诉一下火是怎么着起来的。 (どうして火がついたか教えてください。)
5. 请问着火地点能不能进消防车? (火のついた場所は消防車が入れますか?)
6. 请先切断火源。 (まず火の元を切ってください。)
7. 请打开消防栓。 (消火栓を開いてください。)
8. 灭火器要准对火苗。 (消火器は火の元に向けてください。)
9. 易燃品不要放在火源附近。 (燃えやすいものは火のそばに置いてはいけません。)
10. 请注意用火安全。 (火の安全に注意してください。)

(「消防隊員のための中国語」88頁)

外国語テキストの宿命として、教科書の例文通りに実際の会話が展開するという保証はないのですが、少なくとも消防コースの受講者には一定の臨場感をもって中国語を学んでもらえるように会話をアレンジしていることがわかっていただけたらと思います。

ここで特に注意していただきたいのは、会話1の最後のやりとりです。

甲：消防队的电话是多少？（消防の電話は何番ですか？）

乙：火警，打119就行。（火事は119番でOKです。）

これは火災を知らせるために日本で消防局に連絡する場合の電話番号は119番であることを伝えています。日本人にとっては当たり前のことがらですが、外国から来た人にとって常識であるとは限りません。と言うのも、中国では消防は119番、救急は120番というふうに、それぞれ違う番号に電話するからです。つまり、日本の常識は中国では通用しません。日本で暮らす中国出身の人々にとって、消防車を呼ぶ時も救急車を呼ぶ時も同じ番号119に電話すれば良い、ということはわざわざ伝える価値がある情報なのです。そして、この例文を通して日本の消防隊員と救急隊員にも電話番号119の持つ意味を再確認してもらいます。外国語を学ぶメリットの一つは、自国の常識が他国では非常識になりうることに気づき、同じものでも違う価値を持ちうることを知ることにあると言われますが、ごく身近な場面にもそんな実例がたくさんあるのです。

ちなみに、この第8課に続く第9課のタイトルは“灭火器的使用方法”（消火器の使用手法）、第10課のタイトルは“赶快打开消防栓”（急いで消火栓を開け！）です。各課のタイトルからおわかりいただけるように、いずれも緊急事態発生時の表現を会話形式で例示しています。

そして、第10課では合計10の消防安全常用フレーズを中国語と日本語を対照するかたちで挙げています。更に巻末の付録2では「場面に応じる具体的な会話例」を合計34サンプル列挙しています。この対訳例文集は消防救急に関わる場面で非常に実用性が高い資料ですので、必要に応じて参照していただければ幸いです。

## ことば/外国語によるコミュニケーション

さて、読者の皆さんは「ことばによるコミュニケーション」というフレーズからどのようなことを想像されるでしょうか？多くの人々が「ことばを話したり、聞いたりして、会話すること」だと直感的にお考えになると思います。しかし、言語コミュニケーションは会話だけで成立しているのでしょうか？

日常生活をふりかえればわかるように、コミュニケーションには音声による会話だけではなく、文字を使うコミュニケーションも欠かせません。私たちの日常生活において、手紙や新聞、書籍類、様々な文書類、メモや貼り紙など、SNSや電子メールなどは言うまでもなく、街角の標識や掲示物、そして看板や



ポスターなどに至るまで、すべて「文字を目で見て読む」ことで成り立つ視覚のコミュニケーションです。そして、現在の日常生活では見たり読んだりすることばが母国語である場合はもちろんのこと、外国語を見たり読んだりする場合も考慮に入れなくてはなりません。

私たちは「英語学習とはすなわち英会話学習である」とつい考えがちなのですが、ここに大きな落とし穴があります。ある外国語をたとえどれほど流暢な発音で話せても、手紙や電子メールひとつも書けないようでは、その外国語をマスターしたとは到底言えません。「聞く」「話す」（音声によるコミュニケーション）のみならず、「読む」「書く」（文字によるコミュニケーション）、そして「訳す」（通訳は音声を介するコミュニケーション、翻訳は文字を介するコミュニケーション）という5技能をバランスよく身につけることが外国語学習の最終目標なのです。

では、ここで「ことばによるコミュニケーション」を少しだけ言い換えて「外国語によるコミュニケーション」としてみましょう。その場合、日本を短期間訪れる外国人観光客や日本で長期にわたって生活する定住外国人の立場に立って問題をとらえなおしてみましょう。このように立ち位置を変えて、日本語がわからない人、あるいは日本語が得意ではないマイノリティの人々の立場に立って日本社会の様子を見なおしてみると、現在の日本社会は外国語対応が十全に整っているとは言えないようです。

私たちが勤務している職場や、日々暮らしている街角のあちこちを見なおしてみてください。役所が配布する書類やチラシ、標識や掲示物、そして看板やポスター、道案内など、日本語を母語としない人々が理解しやすいように考慮されているのでしょうか？日本語を解さない人々にとって、日本の社会はまだ十分に親切ではなく、外国語によるおもてなしはまだまだ足りないと言っても過言ではないでしょう。

もちろん未だ不十分であるとは言え、日本で見かける表示や公的サインには多言語対応を施したものが着実に増えています。これは日本社会が多言語化に迫られた結果でしょう。公的サイン類で、日本語のほかに英語、中国語、韓国語を加えたパターンで表記されている表示を「標準モデル4言語」（田中2009）と呼ぶようです。地域や場所によっては、この内のいずれかを除いた3言語、あるいはどれかの言語をポルトガル語やベトナム語など別の外国語に入れ替えた4言語あるいは更に多くの多言語表記もあるかもしれません。特に、中国語の表記では中国で使用されている簡体字と台湾・香港や海外華人社会で使用されている繁体字の2種類の字体を書き分けた配慮をしているものもあります。

いずれにせよ、多言語表記では英語が他の外国語よりも優先的に扱われ、オリジナルの日本語表記のほかに少なくとも英語が書かれているのがデフォルトであることは想像に難くありません。確かに英語は前世紀半ば以降から現在に至るまで国際共通言語であり、日本の学校教育でも今や小学校から教え学ぶ重要な外国語です。

しかしながら、ここで敢えて異を唱えて、現在そして将来の日本社会において英語表記がどれほどの役割を果たせるのか？という問いを立ててみましょう。外国語と言えは英語であるという前提を疑い、日本社会の多言語環境という文脈における英語表記の役割を冷静に考えてみると、英語だけを特別扱ひすることがいかに不合理か、ということに気がつきます。

まず、たとえば、本田・岩田・倉林（2017）に紹介されている法務省『平成28年版出入国管理』によると、日本在住外国人の国籍別ランキングは表1のように中国、韓国、フィリピン、ブラジル、ベトナムの順になるそうです。このデータからわかるのは、日本に在住する外国人の中には英語話者が思いのほか少ないということです。

表1 日本在住外国人の国籍別ランキング

1	中国	665,847人
2	韓国	457,772人
3	フィリピン	229,595人
4	ブラジル	173,437人
5	ベトナム	146,956人

(法務省「平成28年版出入国管理」によるデータ。本田他2017：30頁より引用)

また、岩田（2010）で紹介されている国立国語研究所が2008年に行った調査『生活のための日本語：全国調査』では、日本に在住する外国人が使用している言語は表2のような割合です。ここから、在住外国人の中では英語よりもむしろ日本語が優勢であること、そして中国語使用者の割合が英語使用者の割合に迫っていることがわかります。

表2 日本在住外国人の使用言語

英語ができる人	44.0%
中国語ができる人	38.3%
日本語ができる人	62.6%

(岩田2010によるデータ。本田他2017：30頁より引用)

更に、観光目的で来日する外国人旅行者のデータを見てみると、インバウンドの旅行者が多かったコロナ禍以前の様子を思い出せばわかるように、やはり圧倒的にアジアの国や地域からの訪日者数が多いことが確認できます。

表3 訪日観光客の割合

中国27%、韓国21%、台湾17%、香港8%、アメリカ5%、タイ4%、その他18%
---

(日本政府観光局HPの「訪日外客数」2016によるデータ。本田他2017：35頁より引用)

これら一連のデータから自ずと導かれる推論は、現在の日本社会において、在住外国人と短期訪日外国人のいずれの外国人に対しても、英語表記が果たす役割は一般的に思われているほど大きくはない、ということです。そのことを反映して、日本に在住する外国人に対しては日本語表記、特にひらがな表記の果たす役割が大きいことが広く認識されてきました。特に近年は、語句の選択や表現の簡略化に配慮した「やさしい日本語」に対する関心が深まり、その研究が進展していることは周知の通りです。

もちろん前述のように、特定の外国語話者が集中して居住している地域があるならば、

その外国語での情報提供を優先してコミュニケーションを図ることが最も望ましいと思います。また、短期訪問の来日観光客が多い地域であれば、どの国・地域からの旅行者が多いかを見て、どの外国語を使って対応するのが好ましいかについて個々の対策を練るのが賢明でしょう。

いずれにせよ、ここで強調しておきたいポイントは、英語に過大な期待と効果を期待しないことです。英語表記さえ添えてあれば、それで外国語対策完了…などと短絡的に考えないこと、そして、日本語を得意としない外国からの人々には英語よりも情報伝達の効率が良い言語（たとえば、やさしい日本語や中国語など）が他にもありうることを意識することです。

## 日本の言語景観に見る中国語の問題点

私たちも日常生活の様々な場で、中国語で書かれた表示や標識をたくさん見かけるようになってきました。しかし、せっかく中国語で行った「おもてなし」にも少なからぬ問題が生じています。そこに書かれた中国語が奇妙で不自然であったり、意味不明であったり、



写真1 「足湯」

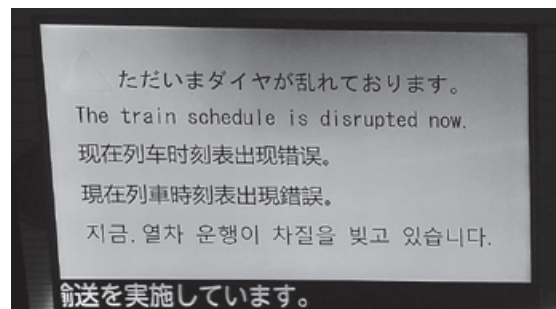


写真2 「列車ダイヤ」

甚だしい場合には、読み手を混乱させたり、立腹させたりするような表現であったりして、日本や中国で話題になることが度々あります。参考までに実例を2点見ていただきましょう。

写真1は日本語、英語、中国語、韓国語の標準モデル4言語で書かれた「足湯」の案内看板です。この中国語「燙脚（限制期限）」は「足の火傷（期限を制限する）」という意味でしかなく、正しい意味を伝えていません。また、写真2は標準モデル4言語タイプで、しかも中国語は簡体字と繁体字の両バージョンで表示している点は評価できるのですが、この案内表示の中国語では「現在列車の時刻が間違っています」のような意味になり、やはり齟齬が生じています。写真1は“足浴(期間限定)”、写真2は“目前列车运行时刻因故发生异常／目前列车运行时刻因故发生异常”のように表記すれば問題は解消します。

せっかく中国語を使って中国語圏からの旅行者や生活者に情報を提供しようとしたのにもかかわらず、所期の目的を達成できないどころか、笑い話のネタになったり、見る人を不愉快にさせるようでは、情報の送り手も受け手もどちらも浮かばれません。

まず私たちはこのような好ましくない状況が現実には生じていることを知り、対策を練る必要があります。こういった問題を修正するための対策が重要ですが、実はきわめて単純です。まず、外国語翻訳ソフトなどを使った機械翻訳を過信しないことです。残念ながら、機械翻訳の実力は文脈を正しく読みこみ的確な文体で翻訳を産出できるほどの精度にはまだ達していません。たとえば、写真2「ただいまダイヤが乱れております。」は機械翻訳では直訳によって正しい翻訳が得られていませんが、「現在の列車運行時間に異常が生じています」のようにパラフレーズすることで精度の高い翻訳が得られます。このように高品質の翻訳をなすのは、やはり電腦（コンピュータ）ではなく人間の脳なのです。ネイティブスピーカーや外国語のプロのチェック

を経ることで、上に見たような不正確な翻訳文は社会に出て人目に触れる前に却下されはらずです。

ここに述べたことは中国語に限った話ではなく、他の言語でも同じことが言えます。今後ますます増えていく多言語表示の質が向上し、外国語による情報伝達がより一層の効果を上げられるように努力していきましょう。

#### 【参考文献】

- 庵功雄（2016）『やさしい日本語—多文化共生社会へ』、岩波新書。  
 庵功雄、岩田一成、佐藤琢三、柳田直美（2019）『<やさしい日本語>と多文化共生』、ココ出版。  
 岩田一成（2010）言語サービスにおける英語志向—「生活のための日本語：全国調査」結果と広島事例から、『社会言語科学』第13巻第1号  
 佐藤和之（2020）「」の付いた「やさしい日本語」の目的と使い方～外国人も日本人も理解する外国語であるということ～、『国際文化研修』vol.108。  
 田中ゆかり（2009）首都圏の多言語表示—“標準化”の観点から—、『日本語学』28巻6号。  
 ダニエル・ロング、斎藤敬太（2022）『言語景観から考える日本の言語環境—方言・多言語・日本語教育』、春風社。  
 弘前大学社会言語学研究室（2013）「やさしい日本語」作成のためのガイドライン（増補版）、[https://www.fdma.go.jp/singi\\_kento/kento/items/kento207\\_20\\_sankou5-6.pdf](https://www.fdma.go.jp/singi_kento/kento/items/kento207_20_sankou5-6.pdf)  
 本田弘之・岩田一成・倉林秀男（2017）『街の公共サインを点検する—外国人にはどう見えるか』、大修館書店。  
 山川和彦編（2020）『観光言語を考える』、くろしお出版。  
 毎日新聞2013年8月5日掲載記事、「あふれる誤った表現、改善の動きは一部」（古川裕のコメントあり）。  
 日本経済新聞2019年5月11日掲載記事、「誤訳の案内板、訪日客が困惑。退出口に“出ていけ”」（古川裕のコメントあり）。

#### 著者略歴

古川 裕（ふるかわ・ゆたか）

大阪大学人文学研究科・外国語学部中国語専攻教授。北京大学中文系に留学し、文学博士学位を取得。専門分野は現代中国語の教育と研究。

現在、世界漢語教学学会副会長、日本中国語学会理事、日本中国語検定協会理事、香港教育大学人文学院名誉教授、北京語言大学客員研究員などを兼任している。

2008年北京オリンピックイヤーにNHK「テレビで中国語」の講師を担当し、中国語文法をイメージスキーマで教え学ぶ方法が好評を博した。

大阪アジア映画祭では2011年から実行委員を務め、中国・台湾・マレーシアの中国語映画に日本語字幕翻訳を添えている。